

## 「記」の世界

### — 駢文（対句的文体）を基礎とした中唐古文の受容 —

宋吟

平安朝漢文学研究上、作者個人の抒情が託されるジャンルとして注目されてきたのは詩である。しかし、個別的な主題と表現が織り込まれた散文作品も平安朝に存在する。特に注目されるのが菅原道真の世代の文人の述作である。

菅原道真の世代における散文文学の変貌については、川口久雄氏（1961年）によって中唐古文との影響関係が指摘されたものの、氏の提示した論拠が不十分であるために否定されてきた。中唐古文ではなく、韓愈と同時代に生き、散文変革の波を受けた白居易と平安朝漢文学の散文に注視した場合、川口氏の着想はなお有効ではないのだろうか。実人生という固有の経験をもとに表現を練り上げる態度が中唐から平安朝へと受け渡されたと考えられるのである。

また、中唐散文と平安朝文人の散文の影響は、散文による自己表出の発見という、平安朝漢文学史上の転機をもたらした。菅原道真の世代における通念上、散文は詩宴などの集団の場の情調に奉仕するものであり、一個人に限定される情緒を表現可能なものだとして認識されていなかったからである。興味深いことに、菅原道真や紀長谷雄といった、公共向けの詩文の作成に長けた文人たちが、かえって個人的な散文の執筆にも注意を向けていったのである。本発表では、白居易の「草堂記」と菅原道真の「書齋記」を中心に、散文文学の勃興という、平安朝前期漢文学史の掉尾を飾る事象を考えてみたい。なお、本発表の内容・構成は以下のとおりである。

1. 平安朝漢文学における集団性
2. 白居易の「草堂記」と菅原道真の「書齋記」
3. 訓読される漢文
4. 「書齋記」以降の散文